

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 3月 31日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530692

研究課題名（和文）大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究

研究課題名（英文）The Development for the stage model for Student Counseling in University

研究代表者

福盛 英明（FUKUMORI HIDEAKI）

九州大学・健康科学センター・准教授

研究者番号：40304844

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、学生相談機関が相談体制の充実に向けて、各大学や相談機関が自機関の現状を具体的かつ多角的に把握して、課題を明確にするために点検できる「学生相談発展段階表」を作成することである。まず学生相談機関の発展事例研究の質的分析を行い、学生相談機関の発展過程を可視化した。その結果を基に、「学生相談機関発展段階表」を開発した。実際に「学生相談機関発展段階表」を用いてインタビュー調査等を通して改良を行い、最終的に「学生相談機関発展段階イメージモデル表」を完成させた。このイメージモデル表を用いて、学生相談機関の全国調査データなどを検討した。

研究成果の概要（英文）：The Development Image Model and the evaluation system of Counseling Center for Students in University in Japan was developed. Qualitative Research (KJ-Method) for case studies of development for counseling centers in Japan conduct to create the step models of development for counseling centers. After this procedure, “The assessment lists of development for counseling centers” named in Japanese, “The Gakuseisoudan Hattendankai Image Model Hyo” was developed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学生相談、発展段階モデル、学生相談機関発展段階イメージ表

1. 研究開始当初の背景

近年、大学において学生相談の件数が増加傾向にあるとともに、内容についても多様化・複雑化し、心理カウンセラーの未配置問題など、学生相談体制が十分でない大学もあり、学生相談の充実が求められている。一方、日本学生相談学会の学生相談機関に関する調査報告（吉武ら、2010）では、いまだ多く

の大学で学生相談体制が十分整備されておらず、個々の現場のカウンセラーや教職員の個人的な努力によって運営されている相談機関が数多くある、と指摘されている。2007年3月に「大学における学生相談体制の充実方策について－『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談』の『連携・協働』－」（「苦米地レポート」）が出されたが、「学生相談は

大学教育の一環であり、大学はその充実を計らなければならない」と述べられている。この報告書は、我が国の学生相談の充実を図り、体制を整備する方向性を示すものである。学生相談の充実とは、ニーズに即した質の高い活動を、安定して行えるということである。今後、学生相談体制の現状や課題を明らかにし、大学が学生相談の充実に向けての整備を図る際に参考となる指針を策定することが必要とされている。

このような方針に基づき、学生相談体制の充実に向けて取り組むために、各大学や相談機関が自機関の現状を具体的かつ多角的に把握して、課題を明確にし、今後の発展のビジョンをもつことが重要である。その際の目安として、各大学の状況や個別性を尊重しつつ、学生相談機関が十分に機能するに必要な諸条件を示す共通の学生相談ガイドラインの策定が待たれる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学生相談ガイドラインの前段階となる学生相談機関の発展段階発展モデルを作成することである。筆者らは、本研究を図1のように位置づけ、各大学の教育理念や実情にあった、特色のある個性的な学生相談活動を展開するために、その基盤を充実させていくことを重視している。

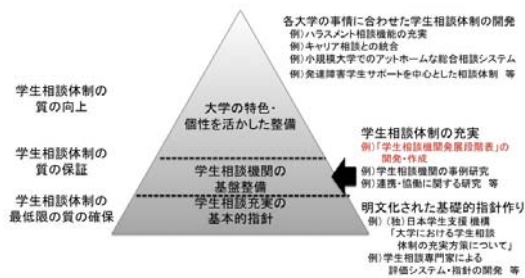


図1 学生相談体制の充実と「学生相談発展段階イメージモデル表」の位置づけ

本研究では、学生相談機関の発展状況の記述を、領域や項目別に段階的に示し、「ここまで来たのか」「次はあそこを目指そう」というように、里程碑であるとともに道標となるツールとして「学生相談機関発展段階表」を開発する。各学生相談機関の発展状況を時

系列でイメージし、現在の状況をプロフィールによって把握し、全体像と課題を明確にすることで、今後の発展の方向性を検討するためのツールとして用いられることをねらいとしている。

3. 研究の方法

(1) 学生相談機関の発展事例研究の質的分析を行い、学生相談機関の発展過程を可視化する

(2) その結果を基に、「学生相談機関発展段階表」を開発する。

(3) 実際に「学生相談機関発展段階表」を用いてインタビュー調査などを行い、改良を行う。

(4) 学生相談機関の全国調査データなどと組み合わせながら、「学生相談機関発展段階表」を完成させる。

4. 研究成果

(1) 学生相談機関の発展事例の質的分析

日本学生相談学会誌「学生相談研究」、各大学の紀要、著書などから、学生相談機関の組織としての立ち上げや発展・充実が記述されている学生相談機関の事例研究を収集した。学生相談機関の発展に着目し、時系列的にくわしく記述があり、考察がなされているものを対象にした文献を選択し、合計10編の論文を対象とした。学生相談体制が発展したと考えられる契機に関するキーワードや、考察に記述してある相談機関充実のサジェスションや今後の課題を抽出し、キーワードをカード化(158枚)し、筆者らのうち3名でKJ法の手法(川喜田1967, 川喜田1970)を用いて分析した。その結果2つのプロセスからなる発展過程が浮かび上がってきた。

① 学生相談機関の誕生から成長する時系列的過程

学生相談の発展の端緒は、学生相談機関の開室準備と告知・広報・周知である。これらの設置準備をおこなうことで、その後の学内連携をスムーズにし、室長を置くことなどを通じて、実効的組織の充実化を早める働きが認められた。周知後は、教職員との連携や相談機関に対する学内での学生の認知度が重要になってくる。困難事例への対応や、成績不振学生への対応、また学外機関との対応の際に窓口になるなど、教職員との連携を通じて効果を実感してもらうことが、相談機関の

存在意義に繋がってくるという流れが想定された。これらの活動の有効性が徐々に学内で認められ、学生支援に対する期待が高まってくると予算が計上される。これにより、開室時間の増加や相談スペースの確保、スタッフの充実へと繋がり、質の高い相談やニーズに合わせた相談が提供できるようになってくる。

②学生相談機関としての組織作りの過程

大きな流れとして、はじめに大学内の位置づけの明確化が必要であると考えられた。具体的には、最初に室長の決定、運営委員会の立ち上げなど、大学内での運営責任者を決め位置づけを明確にする必要がある。実際に学生相談機関が立ち上がり、運用が始まると、運営制度の整備が必要となる。具体的には、規程を作り、人事制度の整備が必要となってくる（人事規程や俸給制度や給与体系なども含む）。学生相談機関の規程などを整備しながら、大学の使命や理念と学生相談機関の理念と使命をすりあわせていくといった流れがあることが認められた。最終的には学生相談本来の理念や目標が設定され、学内で共有されていくと考えられた。

これらの分析より、人事規定や予算の独立性などの全学的位置づけ、カウンセラー・受付人員の配置・増員・昇任などの人的環境の充実、相談室の開室や相談日数の増加などの物理的環境の充実、相談ニーズ・相談件数増加などの利用状況の変化、研修会の講師をつとめるなどの役割の多様性、学内委員会やミーティングの実施などの全学とのつながり、パンフレットやガイドブックの作成などの活動などが発展の契機であることがわかってきた。

(2)「学生相談機関発展段階表」(ver. 1)の開発

評価領域・項目を考えるにあたり、学生相談機関の事例研究の質的分析の結果と、報告書「大学における学生相談体制の充実方策について」の「第3章：学生相談体制のあり方ー学生相談機関・専門家の充実」の項、1. 学生相談機関の設置①学生相談機関の使命②全学共通基盤としての位置づけ③学生相談機関の運営、2. 学生相談機関の役割・活動（業務）①学生相談機関の役割②大学における活動（業務）3. カウンセラー等の充実①カウンセラーの位置づけ②カウンセラーの配置数③カウンセラーの資格④カウんセ

ラーの時間配分、をベースにした。これにアメリカの CAS, IACS の基準も参考にしながら再検討した結果、①組織の位置づけ（学生相談機関の位置づけ、規程、予算措置）②役割、機能（学生相談機関の役割、学生相談活動（業務）の種類）③利用者への利便性・設備（学生相談の開室日・学生相談機関へのアクセス、利用しやすさ、学生相談機関の施設）④人的資源（カウンセラー）（カウンセラーの配置数、カウンセラーの仕事量、カウンセラーの常勤性・専任性・資格）⑤相談の質の維持・向上（倫理・評価、研修）の5つの領域を設定した。

次に、記述してある充実した学生相談機関の段階をレベル5とし、また、カウンセリング・サービスが全く提供されていない段階をレベル0とした。その間を5段階にわけ、それぞれの段階で考えられる状態を記述し、段階表にまとめた。これを「学生相談機関発展段階表（発展段階表 Ver. 1）」と命名した。

(3) 発展段階表を用いた自己点検評価への活用・インタビュー調査

A 大学（大規模国立大学）に自己点検評価に参考資料として活用してもらった。また B 大学、C 大学（私立大学）へ「発展段階表 (Ver. 1)」を用いてインタビュー調査を行った。

これらの結果から、発展段階表の長所として「現在のカウンセリングセンターの充実度と今後どう発展させたいか、客観的に把握できた。」「領域別に別れているので、プロフィールとして把握しやすい。」という点が認められた。一方「実際につけながら、記入しにくい項目がいくつかあった。」「段階表において、段階の記述にあいまいな点が見受けられた。」「学生相談機関の独立志向については、議論が必要。特に私立大学においては、組織のあり方と働きがかなりリンクしている」「はたして、この段階表のレベルが高くなるのが、スタッフの幸せにはつながるのか？仕事量は増えるが、無理が増え、仕事の質が下がったり、仕事の充実感が下がったりしないだろうか」などの検討点が浮上した。

(4) 段階表の改良～「学生相談機関発展段階イメージモデル表」の開発～

最初の発展段階表の位置づけは発展の度合いをチェックする評価表として「段階表」を位置づけたが、厳密な評価を行うツールに改良すると、現状への理解は細かくイメージしやすいが、未来展望について直感的に

とらえることが難しくなるというジレンマがでてきた。そこで、各大学自身が発展の来し方行く末を見通し、「どこまで来たのか、次の目標は何か」を見定め、将来のビジョンを形成することをサポートするための「イメージモデル表」へと位置づけを転換することとした。そこで学生相談機関の全体像を提示するため、また機関の特徴や課題を把握しやすくするために、各項目の上位にその段階の典型的な状態の記述を設定した。また、全体の記述を簡素化した。

各段階の総合的なイメージは、以下とした。

段階1：整備されていない段階：学生相談機関として学生の相談を受ける体制がほとんどない。

段階2：あまり整備されていない段階：学生相談機関の主な働きは個別面接に限られ、活用されていない。また、予期せぬ事態に対応できない。

段階3：整備されつつある段階：学生相談機関は個別相談以外のニーズにも対応しているが、十分活用されているとは言えない。予期せぬ事態にこらうじて対応できる。

段階4：かなり整備されている段階：学生相談機関として多様なニーズに対応し、活用されている。予期せぬ事態にも対応できる。

段階5：高水準で整備されている段階：学生相談機関として多様なニーズに対応し、よく活用されているだけでなく、さらに開発的な取組を行っている。予期せぬ事態にも的確かつ戦略的に対応できる。

また、記述面では、学生相談機関およびカウンセラーの定義を見直し、段階1を設定し、発展段階表は、もっとも発展した状態を左におき、右へ向かうほど発展をしていない記述になっていたが、左右の軸を反転させ、右にいくほど発展しているように改良した。

私立大学の学生相談機関における多様な展開をも包括するように、項目を再点検した。ただし、在籍学生1,000人以下の大学については、組織の位置づけ、スタッフ構成、報告書、相談機関の利用促進活動などの在りようにおいて、本発展段階イメージとは大きく異なる展開が考えられるため、適用対象から除外した。全面的な改訂を行い「学生相談機関発展段階イメージモデル表」が作成された。

(5)「学生相談機関発展段階イメージモデル表」を用いた調査

「学生相談機関発展段階イメージモデル表」「記入の手引き」「回答用紙」を作成した。「学生相談機関イメージモデル表」を用いて、実際に学生相談機関のカウンセラーに回答してもらい、①実際の得点の分布②本イメージモデル表の持つ良い点や問題点などの自由記述を集めた。

平成23年11月の全国学生相談研修会の時に、講師と参加者に記入を依頼した。また、平成24年1月の九州沖縄地区学生相談ネットワーク研修会時に記入を依頼し、31大学から回答を得た

「学生相談機関発展段階イメージモデル表」の各領域・項目ごとの得点分布、各領域の平均を見た。次に、国公立・私立大学における学生相談機関発展段階イメージモデル表の各領域・項目ごとの充実度平均値を算出した(図2)。

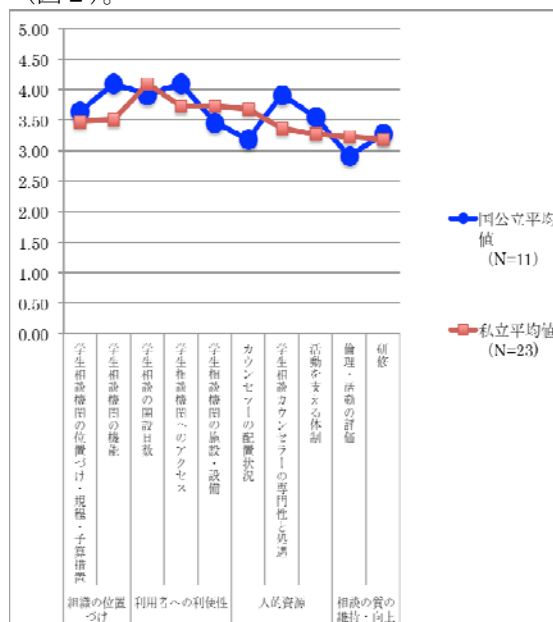


図2 国公立・私立大学における学生相談機関発展段階イメージモデル表の各領域・項目ごとの充実度平均値

また国公立・私立大学の大学規模別の学生相談機関発展段階イメージモデル表の各領域・項目ごとの充実度平均値を算出した。この結果から、国公立大学と私立大学では、発展のプロフィールが異なっていることが明らかになった。

今回の調査からは、学生相談機関の機能やアクセス、専門性と処遇に関しては国公立大学が充実しており、施設・設備や配置状況、倫理活動の評価などは私立大学の方が充実

しているという結果となった。国公立大学では、カウンセラーは教員身分であり、学生相談機関の機能、学生相談カウンセラーの専門性と処遇、活動を支える体制について、大規模国公立大学が高い得点をとる傾向がみられた。

(6) 全国調査データとの連結

完成した「学生相談機関発展段階イメージモデル表」を使って、「学生相談機関に関する調査報告」(吉武ら, 2010)のデータを元に、現在の学生相談機関の発展の現状について検証を行った。吉武ら(2010)の巻末「資料」のデータのうち、短期大学と高等専門学校、学生数1000人以下の大学を除いた大学のデータのみを対象とした。以下、基礎的なデータを示す。

学生相談機関の予算について、44.1%の機関に独立した予算がついていた。また規程であるが、53.2%の機関がその機関の規程をもっていた。

教育活動においては、授業を部分的に担当している大学は12.6%であった。調査研究を行っている大学は54.7%であった。

利用者への利便性については、週に0~2日の開室日が12.6%強、4日以内で27.1%であり、週に5日以上の開室日は73.9%であった。

カウンセラー数は、学生3,333人にカウンセラー1名以上配置されている機関は27.1%を超えていた。また学生2,000人にカウンセラー1名以上の配置になっているところは16.2%であった。一方で、学生1万人以上にカウンセラー1名の配置は20.6%であった。

報告書の刊行は43.8%、自己点検評価システムを持つ大学は42.1%であった。倫理規定を持っているところは約14.7%であった。

外部研修に参加できているのは75.6%、それが業務として認められているのは55.6%であった。予算が確保されているのも57.4%であった。過半数の大学で外部研修が業務の範囲内で参加でき、予算が確保されていた。

一方、内部研修に関しても38.2%の機関では内部研修を実施しており、それが業務時間として認められているところは35.0%である。ただし、予算までが確保されているところは、19.1%となっていた。

いくつかの項目について、国立大学、公立大学、私立大学で大きな差異が見られた。例

えば、教示・助言や危機介入などは、国立大学のほうが多くなされており、授業や正課外活動の講演会なども国立大学が多くなされていた。また、予防啓発活動や、教職員を対象とした活動、大学運営への貢献、調査研究なども国立大学のほうが多くなっていた。

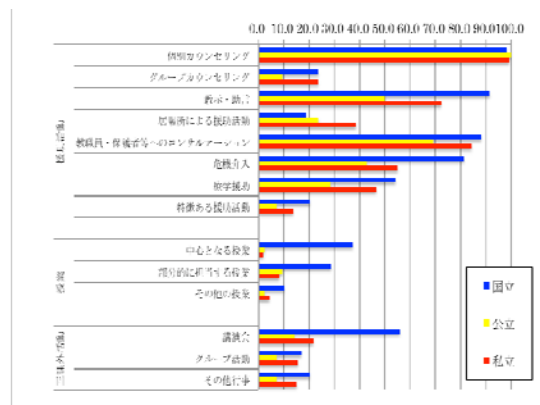


図3 全国調査における国立・公立・私立大学別の「活動の内容—援助活動」の現状

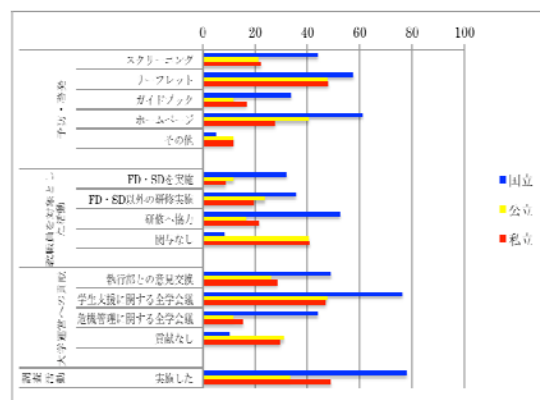


図4 全国調査における国立・公立・私立大学別の「コミュニティ活動」の現状

(7) まとめと今後の展望・課題

① 「学生相談機関発展段階イメージモデル表」の活用

これまでは各大学の学生相談担当者は自分の所属する相談機関の特色や充実・発展の方向や未来展望が見えづらいということがあった。この理由は、学生相談担当者の多くは一人で機関に勤務していたり、兼任で担当し大学内での地位が独立していない、といった勤務形態上の問題点もあると思われるが、一方で学生相談機関の質について標準化された指標がこれまでなかったことも一つの原因と考えられる。今回完成した「学生相談機関発展段階イメージモデル表」を用いるこ

とで、各大学の学生相談機関の特色が明確になり、今後の課題も明確になると思われる。

定期的に学生相談機関が評価を行うことで、学生相談機関の充実度がどのように増してきているかを把握できるという利点がある。このようなデータと学生の満足度やメンタルヘルス、修学状況などのデータと組み合わせ、学生相談充実の意義についてデータとして確認できるであろう

(6) 「学生相談機関発展段階表」の課題

①「発展段階イメージモデル表」の「発展」調査の自由記述から、学生相談の発展について3次元でのモデルを考えた。

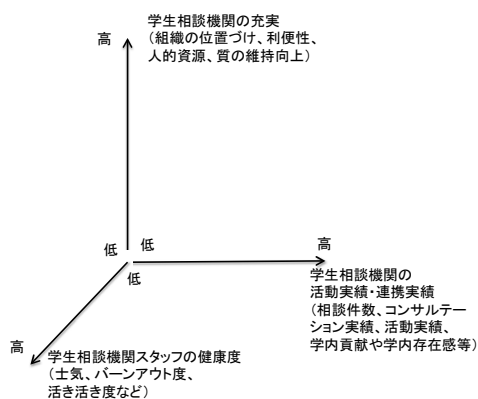


図5 3次元方向への学生相談機関の発展

この「学生相談機関の充実」「学生相談機関の活動実績・連携実績」「学生相談機関スタッフの健康度」の3つの軸は、相互に関連しながら、しかし、バランスをとることを意識し、かつどの軸も充実させていくことが学生相談の充実であると考えられる。

②発展段階論のデメリット

「発展段階論」という方法論が一元的に発展することを前提としており、多様な発展プロセスがすべて表現されてはいない。しかし本発展段階表は、より質の高い専門的な学生相談を安定的に長期的に提供できるような基盤を充実させていくことを目的として作成されているので、筆者らは、ある一つの理想的な学生相談像にすべての学生相談機関を近づけることを目指してはいない。

③欧米の学生相談機関の動向と我が国における「学生相談ガイドライン」作成の意義

アメリカでは、CASやIACSなどに学生相談のスタンダードやガイドラインが整備されており、質の保証が行われている。我が国に

も学生相談ガイドラインを設置することは、重要な意味を持つと言える。本研究が、我が国の学生相談のガイドライン作成に役に立てればと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

①福盛英明・隈本晶子・飯田想平・松下智子 (2012) 大学における学生相談機関の充実・発展に関する質的検討の試み 健康科学 査読無、34巻、p35-41

〔学会発表〕(計2件)

①福盛英明・吉武清實・山中淑江・大島啓利・苫米地憲昭・齋藤憲司・池田忠義・野明・内野悌司・峰松 修 学生相談体制充実のための「学生相談機関発展段階表」の開発 日本学生相談学会第28回大会(盛岡) 2010.5.9. 岩手大学(盛岡)

②福盛英明・山中淑江・大島啓利・金子玲子・吉武清實 大学カウンセラーの処遇の実情と希望 全国学生相談研究会議

2012.1.27. 広島

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福盛英明 (FUKUMORI HIDEAKI)

九州大学・健康科学センター・准教授

研究者番号：40304844

(2) 研究分担者

吉武清實 (YOSHITAKE KIYOMI)

東北大学・高等教育開発推進センター・教授

研究者番号：80111243

池田忠義 (IKEDA TADAYOSHI)

東北大学・高等教育開発推進センター・准教授

研究者番号：70333763

内野悌司 (UCHINO TEIJI)

広島大学・保健管理センター・准教授

研究者番号：00294603

山中淑江 (YAMANAKA YOSHIE)

立教大学・学生相談所・カウンセラー

研究者番号：10267388

高野 明 (TAKANO AKIRA)

東京大学・学生相談ネットワーク・講師

研究者番号：50400445

(3) 連携研究者

峰松 修 (MINEMATSU OSAMU)

九州産業大学・国際文化学部・教授

大島啓利 (OSHIMA HIROTOSHI)

広島修道大学・学生相談室・カウンセラー